

現代トルコ語における正書法の変更¹⁾

菅原 睦

0 はじめに

1923年に成立したトルコ共和国は、一連の「近代化」政策の重要な一環として1928年にアラビア文字を廃止しラテン文字を導入することを決定した。この時に制定された29文字から成るトルコ語のアルファベットは、トルコ語の音韻によく対応した合理的なものであり²⁾、今日十分に定着・普及していると言ってよい。その一方でこのラテン文字によるトルコ語の正書法は何度かにわたる細部の変更を経てきている。この事実は文法書などで取り上げられることも少なく、これまであまり関心を集めていないようである³⁾。しかしトルコ本国においては、特に80年代以降の正書法の変更は大きな論議を呼んだ問題であった。本稿ではこの80年代以降のトルコ語の正書法の変化を整理し、若干の考察を加えたい。

1 トルコにおけるラテン文字正書法の変遷

1928年のラテン文字採択の決定を受けて、翌1929年には言語委員会(Dil Encümeni)により『正書法辞典』*İmlâ Lûgati*が刊行される。その後1941年にはトルコ言語協会Türk Dil Kurumu⁴⁾による『正書法手引き』*İmlâ Kılavuzu*が刊行され、こうしてトルコ語の正書法がひとまず確立したことになる。

『正書法手引き』の刊行から24年後の1965年に、トルコ言語協会は『新・正書法手引き』*Yeni İmlâ Kılavuzu*を発表する。ここではそれまでの正書法にかなりの変更が加えられたようである。翌66年には第2版、67年には第3版、69年には第4版が出版された。さらに1970年には『新・書き方(正書法)手引き』*Yeni Yazım(İmlâ) Kılavuzu*の名称で第5版が出版され、結局1981年までにトルコ言語協会による『手引き』は全部で11版を数えた。これら全ての版がそれぞれ異なる正書法を提案した訳ではないにせよ、60年代および70年代を通じて正書法にしばしば変更が加えられたのは事実であった⁵⁾。

このような状況を変えたのが1980年に起こった(三度目の)軍事クーデターで

ある。クーデターの結果として、トルコ言語協会は1983年にアタチュルク文化・言語・歴史高等機関Atatürk Kültür, Dil ve Tarih Yüksek Kurumuの一部門となる形で政府の統制下に入った⁶⁾。こうして成立した「新」言語協会は、それまでの混乱を收拾する目的で正書法の改定に取り組み、1985年に『正書法の手引き』*İmlâ Kılavuzu*を発表する。しかし「新」言語協会による改定正書法はそれまでの流れを大きく変えるものであったため、かつての言語協会のメンバーを中心に激しい反発を招き、その結果対抗案として1987年に『基本書き方手引き』*Ana Yazım Kılavuzu*が出版されるに至る。これは「新」言語協会による正書法の改定を批判し、「旧」言語協会時代すなわち80年代初頭までの正書法を継承したものと言うことができる⁷⁾。

正書法をめぐる対立はなおも続く。「新」言語協会は、『基本書き方手引き』に見られる批判に対する反論として『言語論争における真実1』*Dil Tartışmalarında Gerçekler 1*を1990年に出版する。『基本書き方手引き』がその後も版を重ねる一方で、「新」言語協会は一部の改定の見直しを行う。そして1996年に、部分的に85年以前の正書法をも取り入れた最新の正書法が決定されて今日に至っている⁸⁾。

以上がトルコ語の正書法の変遷のあらましである。とりわけ80年代以降に正書法をめぐる生じた対立は、言語とイデオロギーとが密接に結びついたトルコならではの現象であり、他ではあまり例を見ない種類のものであろう。

2 3種類の正書法の比較

本章では、80年代以降にトルコ言語協会により出版された3種類の辞書を取り上げ、そこで用いられている正書法を比較する。対象とするのは次の3つの辞書である。

A. 『トルコ語辞典』増補第7版 1983年

「旧」言語協会によって出版された最後の辞書である。巻頭に正書法の概要が示されている(pp.IX-XIV)。用いられた正書法が何によっているかは明記されていないが、『新・書き方手引き』第10版(1980年)のそれと概ね一致している⁹⁾。

B. 『トルコ語辞典』新版 1988年

「新」言語協会による最初のトルコ語辞典。正書法についての言及は見られないが、参考文献の中に1988年版『正書法手引き』が挙げられており(p.XXXI)、同書の正書法によっていると判断される。

C. 『トルコ語辞典』第9版 1998年

同じく「新」言語協会による。1996年版『正書法手引き』によっていることが序文に記されている(p.X)。

a ^ 記号の使用¹⁰⁾

トルコ語の表記における ^ 記号の使用は複雑な変遷の過程を経て来ている¹¹⁾。この記号の主な役割は次の2つである。

1. (â, û, î) 借用語に見られる長い母音 a, u, i を表す。
2. (â, û) 借用語において見られる, 先行する k, g (および l) の口蓋化を示す。

例. **kâ** [k^ʲa] ~ [ca] : **ka** [ka]¹²⁾

この2つの役割自体には変更は見られない。

	A B C	
「習慣」	âdet	(< Ar. 'âdat)
「裁判官」	hâkim	(< Ar. hâkim)
「物語」	hikâye	(< Ar. hikâyat)
「総計」	yekûn	(< Ar. yakûn)
「司令部」	karargâh	(< Pers. qarâr-gâh)

しかし60～70年代の正書法の変更の結果, この記号の使用に制限が加えられた。具体的には, アラビア語のいわゆるニスバ形容詞の-iに由来する長いiや, 口蓋化したlの後のa, uはもはや ^ を用いずに表記されるようになっていた。一方80年代の改定ではこの制限が解除され, ^ 記号が用いられるケースは再び増大した¹³⁾。

	A	B	C	
「真剣な」	ciddi	ciddî	ciddî	(< Ar. ciddî)
「真剣になる」	ciddileş-	ciddîleş-	ciddîleş-	
「必要な」	lazım	lâzım	lâzım	(< Ar. lâzım)
「ラテン語」	Latince	Lâtince	Lâtince	
「様式」	üslup	üslûp	üslûp	(< Ar. uslûb)

b ' 記号の使用

ラテン文字正書法の制定当初は, アラビア語の声門閉鎖音(ʾ)および有声咽頭摩擦音(ʿ)に由来する語中の声門閉鎖音を表すために, ' 記号が用いられていた¹⁴⁾。その後の正書法の変更により, 声門閉鎖音を示すための' 記号はいったん廃止されたが¹⁵⁾, 80年代の改定以降この記号が再び用いられるようになった。CにおいてはBよりも

さらに多くの語でこの記号が用いられている¹⁶⁾。

	A	B	C	
「些細な」	cüzi	cüz'î	cüz'î	(< Ar. <i>cüz'î</i>)
「くじ」	kura	kur'a	kur'a	(< Ar. <i>qur'at</i>)
「決して」	katiyen	kat'iyen	kat'iyen	(< Ar. <i>qaṭ'īyan</i>)
「大陸」	kıta	kıta	kit'a	(< Ar. <i>qīt'at</i>)
「コーラン」	Kuran	Kuran	Kur'an	(< Ar. <i>Qur'ān</i>)
「幸福な」	mesut	mesut	mes'ut	(< Ar. <i>mas'ūd</i>)
「速度」	sürat	sürat	sir'at	(< Ar. <i>sur'at</i>)

c 複合語の表記

複合語の認定とその表記についてもいくつかの変更が加えられた。まず85年の改定により、それまで複合語として扱われ一語で書かれてきたものの多くが分かち書きされるようになった¹⁷⁾。

	A	B	C
「白チーズ」	beyazpeynir	beyaz peynir	beyaz peynir
「中指」	ortaparmak	orta parmak	orta parmak
「大使館」	büyükelçilik	büyük elçilik	büyük elçilik
「共時的な」	eşzamanlı	eş zamanlı	eş zamanlı
「虹」	gökkuşağı	gök kuşağı	gök kuşağı

しかしその後さらに基準の見直しが行われ、分かち書きに関する細かな規定が新たに設けられた¹⁸⁾。その結果、Bでは分かち書きされていたがCでは再びAと同じく一語で書かれるようになったものや、CにおいてA、Bのいずれとも異なる書き方が採用されたものが見られる。

	A	B	C
「今日」	bugün	bu gün	bugün
「蚊」	sivrisinek	sivri sinek	sivrisinek
「無神経な」	vurdumduymaz	vurdum duymaz	vurdumduymaz
「冷蔵庫」	buzdolabı	buz dolabı	buzdolabı
「十二指腸」	onikiparmakbağırsağı	on iki parmak bağırsağı	onikiparmak bağırsağı

なお同じく2つの要素の複合による次のような例では、分かち書きは一度も採用されていない。

	A B C
「総（大）主教」	başpiskopos
「紳士」	beyefendi
「非常時の」	olağanüstü
「アrikay」	kanncaiyen
「客好きの」	konuksever

さらに複合語の綴りに関連しては、分かち書きの問題以外に次のような変更も注目される。

c' 固有名詞を含む複合語の表記

固有名詞を含む複合語では、固有名詞の部分は大文字で書き始める¹⁹⁾。

	A	B C
「ピスタチオ」	antepfıstığı	Antep fıstığı
「ココナツ」	hindistancevizi	Hindistan cevizi
「柿」	trabzonhurması	Trabzon hurması

c" 学問分野の名称

学問分野の名称において、直訳的な「名詞－bilim（「学問」）」をよりトルコ語的な構成による「名詞 + bilim－i（3人称所有接尾辞）」に改める²⁰⁾。これは語構成上の変更である。

	A	B C
「言語学」	dilbilim	dil bilimi
「天文学」	gökbilim	gök bilimi
「神学」	Tannbilim	tann bilimi

d その他

85年の改定では、いくつかの借用語に対してより語源を重視した表記が採用され

た。ただしその後見直しが行われ改定前の表記に戻ったものもある。

	A	B	C	
「病院」	hastane	hastahane	hastahane	(< Pers. <i>xasta</i> + <i>xāna</i>)
「キリスト教徒」	Hristiyan	---- (!)	Hristiyan	(< Gr. <i>xristianos</i>)
「写真」	fotoğraf	fotograf	fotoğraf	(< Fr. <i>photographe</i>)
「トイレ」	tuvalet	tualet	tuvalet	(< Fr. <i>toilette</i>)

Bで採用されたhastahane, fotograf, tualetという綴り字は、語源により忠実であると同時にそれぞれkütüphane「図書館」, paragraf「段落」, aksesuar「アクセサリー」(以上ABC)といった綴り字と並行するものでもある²¹⁾。

3 考察

前章では、80年代初めから近年に至るまでの正書法の移り変わりを概観した。ここでこの問題に関して何らかの評価を下すことは差し控えるが、一連の動きは次の2点に集約することが可能であろう。

1 「新」言語協会による85年の改定は、トルコ語の正書法に大きな変更をもたらすものであったが、その全てが広く受け入れられるところとはならず、約10年を経過した96年には改定以前の正書法が部分的に復活することになった(上記c, dを参照)。

言語協会のこのような現状追認と言うべき姿勢は、『手引き』の性格自体にも認められる。例えばdöğmek~dövmek, oğmak~ovmak, öğmek~övmekのようなヴァリエント形式について、93年版『手引き』が「共通発音においてvをもつ形式がより普及している」点からdövmek, ovmak, övmekのように書くことが「必要である」(p.11)としているのに対し、2000年版は「共通発音においてvをもつ形式がより普及している」ものの、ğをもつ形式も「消滅したわけではない」(p.14)と述べるにとどまっている。言い換えれば、2000年版はその「規範」としての性格を弱めているのである。

2 85年の改定の大きな特徴は、借用語の綴りにおける語源主義とすることができる(上記b, dを参照)。そして綴り字における語源重視の背後には、発音においても語源により忠実であろうとし、トルコ語の音韻体系に同化した形式を排除する傾向が窺える。例えば「病院」を意味する語では、Aの綴り字hastaneが明らかに[haxstœne](Ergenç 1995)のような発音に基づいているのに対し、BCはhastahaneという綴り字を採用すると同時にhastaha:neという発音表示を挙げている²²⁾。b. で見た声門閉鎖音を含

む語例についても、Aの綴り字 *cüzi, kura* などがこの音を脱落させた [dzyzi], [kurœ] (Ergenç 1995)のような形式を反映するのに対し、BCのそれはこの音を保持した形式を反映している²³⁾。さらに注目される例としては「政府」を意味する *hükümet/hükûmet* という語がある。アラビア語 *ḥukūmat* に由来するこの語に対して、Aの綴り字 *hükümet* は第2音節が *kü > kü* の変化を受けることでトルコ語の音韻に適合した形を反映している²⁴⁾。一方BCの綴り *hükûmet* は、発音表示 *hükû:met* から明らかのようにトルコ語の音韻としては異質な「口蓋化したk+長いu」を保持した形を反映するものである。

İmer(1998:613)の指摘によれば、地方からの人口流入により地方の方言が都市の言語に影響を与えた結果として、借用語の音韻面での「トルコ語化」が近年進展しつつあるという。具体的には、*lazım(lâzım), plan(plân), alfabe, kontrol* などにおける [l]~[l̥] > [ʎ] の変化や、母音の長短の区別の混乱があげられている²⁵⁾。もしこれが事実であるならば、「旧」言語協会が進めてきた^の使用の制限(上記a参照)が、借用語の同化の流れにそった(あるいはそれを先取りした)ものであったのに対し、「新」言語協会による^の復活は、そのような同化を押しとどめ「正統的」な形式を固定する効果をもつものであったと言えるであろう。同じことは'の不使用/使用についても当てはまる。いずれにせよ80年代の正書法の改訂がこのように借用語、とりわけアラビア語・ペルシア語起源の借用語の位置付けと関わるものであった以上、言語の「純化」ということがイデオロギーと密接に結びついているトルコ社会において、これが激しい論議を呼ぶことは避け難い成り行きであったのである。

註

- (1) 本稿は、外国語教育学会第5回研究会(2001年11月24日 東京外国語大学)における報告「現代トルコ語における規範 ―言語改革のゆくえ―」の内容に基づくものである。
- (2) トルコ語アルファベットの全般的な特徴については柴田(1955:603-604)、林(2001)などを参照。
- (3) 例えば近年出版されたLewis(2000)では、70年代に行われた正書法の変更については触れられているものの(p.2, p.7)、80年代以降の変更については記述が見られない。Kornfilt(1997)も正書法の問題を扱っていない。日本語のものでは竹内(1996:iii-iv)に正書法の変更についての解説が見られる。論文としてはİmer(1998:612-613)に80年代以降の綴り字の変化についての言及がある。
- (4) その前身は1932年に設立されたトルコ言語研究委員会 *Türk Dili Tetkik Cemiyeti* である。36年にトルコ言語協会となった。
- (5) 筆者はこれら11種類の版全てを比較検討する機会を得ていないが、この間の正書

法の変更のあらましについては *Dil Tartışmalarında Gerçekler* 1, pp.1-23で述べられている。

- (6) その際に協会のメンバーの入れ替えも行われた。なお「新」言語協会の成立に関しては Boeschoten(1991:173-175), Brendemoen(1998:245), Lewis(1999:153-168)などを参照。
- (7) 『基本書き方手引き』以外にも同様の対抗案として数種類の正書法手引き書が出版されたようである。
- (8) 『正書法の手引き』はその後1988年, 93年, 96年, 2000年に出版されている。このうち筆者が参照できたのは93年版と2000年版のみであるが, 前者の綴り字と, 96年版によるとされる『トルコ語辞典』第9版の綴り字との間にかなりの相違が見られることから96年に再改定が行われたことがわかる。なお言うまでもなく, 言語協会による正書法の変更が実際の出版物その他でどの程度忠実に反映されているかはまた別の問題である。
- (9) 1981年の第11版『新・書き方手引き』は参照することができなかった。なお第10版は林徹氏の御厚意により利用することができた。ここに記して感謝の意を表したい。
- (10) 以下では次の略称を用いる。
- 『手引き』: 『新・書き方手引き』 『正書法手引き』 など
『基本』: 『基本書き方手引き』 第7版 1993年
『論争』: 『言語論争における真実1』 1990年
- (11) cf. Şimşir(1992:94, 199); 『論争』 pp.7-22; Lewis(1999:36).
- (12) 固有語では e/i/ö/ü の前で [kʰ]~[c], [gʰ]~[ç], [l]~[lʰ]; a/ı/o/u の前で [k], [g], [ŋ] という分布を示すため, k, g, l の口蓋化を示すための特別な手段は必要とならない。
- (13) cf. 2000年版『手引き』 pp.7-8; 『基本』 pp.19-22, 44-45; 『論争』 pp.21-22, 40-42.
- (14) cf. Şimşir(1992:94, 199).
- (15) 80年版『手引き』には語中で'記号を用いた例は見出されない。Aには şer' an 「シャリーア上」など少数の例が見られる。
- (16) cf. 2000年版『手引き』 pp.18-19; 『基本』 pp.22-23, 45-46; 『論争』 pp.28-30.
- (17) cf. 『基本』 pp.23-26, 49-52; 『論争』 pp.31-38, 44-46.
- (18) 2000年版『手引き』(pp.30-47)では分かち書きされる場合として31, 一語で書かれる場合として22という膨大な数の規定が挙げられている。これに対して93年版『手引き』は複合語の表記に関してわずか4頁(pp.19-22)をあてているに過ぎない。
- (19) cf. 2000年版『手引き』 p.29; 『論争』 pp.61-65. 並行する例は Adana kebabı 「アダナケバブ」, Ankara keçisi 「アンゴラヤギ」, Özbek pilâvı 「ウズベクピラフ」 Rus salatası 「ロシアサラダ」, Türk kahvesi 「トルココーヒー」(以上Cによる)など多

- 数あるが、これらはAにも80年版『手引き』にも挙げられていないため、どのように表記されるべきであったかは不明である。
- (20) cf. 『論争』 pp.78-79.
- (21) cf. 『論争』 p.55, pp.73-77. なお「地形学者」はA B topografに対してC topoğraf.
- (22) トルコ言語協会編の『トルコ語辞典』には、綴り字から予測不可能な場合に限り簡略化した形で発音が示されている。そこで示される発音と、近年出版された発音辞典(Ergenç 1995)に示される発音とがしばしば食い違っているという事実は、現代トルコ語の「規範的」ないし「標準的」な発音が確立していないことを意味する。
- (23) heyet「委員会」(< Ar. hay 'at), cuma「金曜日」(< Ar. cum 'at), sanat「芸術」(< Ar. san 'at)などの語ではBCの綴り字にも声門閉鎖音を失った形式が反映されている。このことはBCの表記で用いられている'記号が、単に語源的考慮だけではなく発音上の根拠にも基づいていることを意味している。
- (24) cf. [hycymet] (Ergenç 1995). アラビア語のkはトルコ語では[k']~[c]で反映される。註(12)を参照。
- (25) ただし同論文は「新」言語協会を批判する内容のものであり、この指摘自体が「旧」言語協会の正書法を擁護するための意図的な主張である可能性もある。cf. Clements and Sezer(1982:253-254, note 18.).

BIBLIOGRAPHY

- Aksan, D. 1993. "Die neueren Entwicklungen im modernen Türkei-Türkischen,"
in J.P.Laut and K.Röhrborn(eds.) *Sprach- und Kulturkontakte der türkischen Völker: Materialien der zweiten Deutschen Turkologen-Konferenz Rauischholzhausen, 13.-16. Juli 1990*, Wiesbaden : Otto Harrassowitz. pp.5-11.
- Ana Yazım Kılavuzu. 7. basım, İstanbul : Adam, 1993. (『基本書き方手引き』第7版)
新井政美 2001年『トルコ近現代史 イスラム国家から国民国家へ』 みすず書房.
- Boeschoten, H. 1991. "The 'Language Reform',"
in H.Boeschoten and L.Verhoeven (eds.), *Turkish Linguistics Today*, Leiden : Brill.
pp.165-175.
- Brendemoen, B. 1998. "The Turkish Language reform,"
in L.Johanson and É.Á.Czató (eds.), *The Turkic Languages*, London : Routledge.
pp.242-247.
- Clements, G.N. and Sezer, E. 1982. "Vowel and consonant disharmony in Turkish,"
in H. von der Hulst and N. Smith(eds.), *The Structure of Phonological Representations (Part II)*, Dordrecht : Foris. pp.213-255.

- Dil Tartışmalarında Gerçekler* 1. Ankara : TDK, 1990. (『言語論争における真実1』)
- Ergenç, İ. 1995. *Konuşma Dili ve Türkçenin Söyleyiş Sözlüğü. Bir Deneme*, Ankara : Simurg.
- 林徹 1989年 「トルコ語」 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編著)
『言語学大辞典 2 世界言語篇 (中)』 三省堂. pp.1383-1395.
- 林徹 2001年 「トルコ語の文字」 河野六郎, 千野栄一, 西田龍雄 (編著)
『言語学大辞典 [別巻] 世界文字辞典』 三省堂. pp.678-683.
- İmer, K. 1998. "Language reform in Turkey and its aftermath,"
in L.Johanson(ed.), *The Mainz Meeting. Proceedings of the Seventh International Conference on Turkish Linguistics August 3-6, 1994*. Wiesbaden : Otto Harrassowitz.
pp.607-618.
- İmlâ Kılavuzu*. Gözden geçirilmiş yeni baskı, Ankara : TDK, 1993.
(『正書法の手引き』改訂新版)
- İmlâ Kılavuzu*. Genişletilmiş ve gözden geçirilmiş yeni baskı, Ankara : TDK, 2000.
(『正書法の手引き』増補改訂新版)
- Kornfilt, J. 1997. *Turkish*. (Descriptive Grammars), London : Routledge.
- Levend, A.S. 1972. *Türk Dilinde Gelişme ve Sadeleşme Evreleri*. 2. baskı, Ankara : TDK.
- Lewis, G. 1999. *The Turkish Language Reform: A Catastrophic Success*,
Oxford : Oxford University Press.
- Lewis, G. 2000. *Turkish Grammar*. second edition, Oxford : Oxford University Press.
- 柴田武 1955年 「トルコ語」 市河三喜, 服部四郎 (編)
『世界言語概説 下巻』 研究社. pp.591-636.
- Şimşir, B.L. 1992. *Türk Yazı Devrimi*, Ankara : TTK.
- 竹内和夫 1996年 『トルコ語辞典』改訂増補版 大学書林.
- Türkçe Sözlük*. Genişletilmiş 7. baskı, Ankara : TDK, 1983. (『トルコ語辞典』増補第7版)
- Türkçe Sözlük*. Yeni baskı, Ankara : TDK, 1988. (『トルコ語辞典』新版)
- Türkçe Sözlük*. 9. baskı, Ankara : TDK, 1998. (『トルコ語辞典』第9版)
- Yeni Yazım Kılavuzu*. 10. baskı, Ankara : TDK, 1980. (『新・書き方手引き』第10版)